

故郷臆解

市川浩

市川 浩

兔追ひしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れ難き故郷

如何にいます父母
恙なしや友垣
雨に風につけても
思ひ出づる故郷

志を果して
いつの日にか歸らむ
山は青き故郷
水は清き故郷

大正三年小學校六年生用唱歌として世に出でたる「故郷」は百年後の、平成最後の今年も各地、各機會にて唱はるゝ多し。作詩は高野辰之、作曲は永らく大中寅二とも、最近岡野貞一に決定すと云々。

この歌國歌君が代と並びて現在一般に歌はるゝ数少ない文語詩なり。「兔追ひし」、「小鮒釣りし」の「し」は回想する本人の經驗を示す助動詞「き」の連體形なり。學校文法にてはこれを「過去」の助動詞と稱し、英文法の「過去形」との聯想より彼の接尾辭「ed」と認識する多し。又「恙なしや」の「や」は係助詞なれば「恙なきや」なるべしの説あらむも、主語の「友垣」が文末に倒置せらるゝ故に「や」は實質的文末と見るべく、されば是にかゝる用言は終止形と納得するを得。

問題は第三節「志を果していつの日にか歸らむ」の一節にして、今日これを唱ふ方々殆どは「何時の日か志を實現して故郷へ歸りたいものだ」と諒解すべし。問題の一つは文末の「む」が一人稱に作用するが故に主語の「意思」と解するにあり。されど通常の疑問、反語の例もあり、例へば伊勢物語10話にはをとこ、「業平」が武藏の國に在る女に求婚せる所、父が別の人に妻めあはせたしといふを、母は身分の高き血筋の人、「業平」にと思ひて、この増候補に

みよし野のたのむの雁もひたふるに君が方にぞよると鳴くなる
と詠み送りたるに、増候補の返し、

我が方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつか忘れむ

とあり、「みよし野の田の面で私の方に加勢すると鳴いてゐるやうに聞える雁のことをどうして忘れることができませうか、できません」の意なり。従ひ、「故郷」の該當部は「志を果して故郷に歸る日は來るだらうか、分らない」となるべし。但しそれでもなほ努力する積りなるを、青く清らかなる故郷の山水よ見守りくれとの結びにこそ、小學六年生へのこの詩の意圖を読み取るべけれ。

なほ同様の表現が島崎藤村作詩「椰子の實」にあり、作曲は奇しくも同じ岡野貞一にて

思ひやる八重の潮路を何れの日にか國に歸らむ（八重の潮路を離れた故國に歸る日は來るだらうか、
いや來ないと思ふのだよ）。

（平成三十年八月二十七日受附）

第八十七號